



## 企業の分析屋の楽しみ

三菱ケミカルの田畑様からバトンを引き継ぎました、AGC 旭硝子（7月からはAGC株式会社です！）の伊勢村です。田畑様とは民間企業の分析部門在籍という共通点があり、三菱グループの分析部門の会合で御一緒させて頂いたり、同じ横浜在勤ということで、お会いして色々とお教え頂く機会もあります。私は学生時代に始まり、入社後現在に至るまで一貫して分析化学の周辺におり、「分析屋」と自称しています。分析化学の理解度はさておき、根っからの分析好きを公言しており、企業での分析の楽しみを語るのではと思っています。

まず、人脈形成の楽しみです。企業の開発部門の在籍者は、専門分野に近い他企業の方とはどうしても競合関係になりがちで、学会などでも会話が難しいようです。一方、分析部門では、先の三菱グループや、日本分析化学会の産業界シンポジウム、装置メーカー主催の情報交換会など、他社の分析屋さんと交流させて頂く機会が多くあります。分析部門は重要情報の集まる組織ですので、競合関係になくとも門外不出の情報は非常に多いのですが、分析部門のあり方や運営のほか、オープン可能な技術情報などを交換できる機会があることは、大きな魅力と感じています。同業にもかかわらず他社の方と比較的フランクに会話したりお悩み相談(?)ができたりするのも、分析部門が独特の立ち位置にあるためのように思います。

次に、実際の分析の楽しみです。いろいろな事案を経験するなかで、例えば立案した仮説がピンゴで、事実や証拠を重ねて犯人逮捕(問題の根本原因解明)につながったり、さらには提案した対策がはまり、歩留まり改善につながるなど、思い出に残る成功例があったりします。また、新分析法を思いつき、それが実現でき、後に社内外で一般的な手法になったり、運よく社内課題解決につながったりするのは大変な喜びです。それほどでなくても、分析行為は日常的に楽しいものです。予測した保持時間にピークが出てほしいと願い、画面のチャートをリアルタイムで見ながら、「よっしゃ、来い！」と叫んだところできっちり出たり、ピークが狙ったとおりに分離したりするのは、もう醍醐味ですね。クロマト好きがバレたついでにいうと、キャピラリー電気泳動や動電クロマトグラフィー、熱分解GCなど非常にシャープなピークがビシビシ出るのは、見ているだけで爽快です。さらに、質量スペクトル、NMRスペクトル解析がハマったとか、思ってもみない正解が一番乗りでわかったなど、

一人でガッツポーズです。ほかにSEM、TEMでも、優れた技術を持っている同僚がいるので、「今まで見えなかったものが見えた」、「お客様にインパクトがあり採用につながった」などと褒められると、皆でドヤ顔になれたりします。

さて、採用活動などで学生に分析屋の楽しみを説明することもあり、こんなことを話します。「分析部門は得意な仕事です。なぜなら、①全社のあらゆる情報が集まる(とくにネガティブな技術情報)、②関連する製造設備を見学できる、③分析結果から最初に情報を得られる、④長い経験で浅くも広い材料/事業の知識が得られる、⑤同期と飲むと皆の技術や状況を理解できるし、話についていける、⑥他部門への転身の際、ツブしが効く」。どんどん怪しくなりますが、それほど間違っていないのではないのでしょうか。そして、企業の分析屋がどんな活躍ができるかの問いには、「過去の事例に詳しい、材料の分析手法に詳しい、他材料で得た知識の横展開が可能、分析屋の立ち位置からアイデア提案できる」と言っています。「しっかり勉強しながら経験を積むと、とても成長を実感できます！」などの説明も、あまり“盛って”いないと思っています。

さらに最近では、あらゆる部門で新製品開発の競争が激しく、分析の重要性が増していると感じます。自分たちの技術が社業貢献しているという、自己(あるいは自組織)肯定感の強いメンバーが増えると、モチベーションアップから組織の貢献度向上につながります。それが、経営から正しく評価されたり、人が育つ組織だと認識されたりすると、好循環になります。ただ、入社してくる新人は最新の知識と技術を勉強してくるので、古い知識と経験だけでは太刀打ちできず、常に勉強せねばなりません。そんなときも、「ぶんせき」には入門講座や進歩総説など素晴らしい内容が多く、それらに触れられるのも楽しみと言えます(最後にヨイショです)。

駄文を重ね読者の時間を奪ってしまいましたので、このあたりで失礼したいと思います。次の執筆者は、花王株式会社の小池 亮さんにお願ひしました。小池さんは、京都大学大学院工学研究科の大塚浩二先生の研究室で社会人博士課程の同期だった方で、企業の分析屋の集まりでもよく御一緒させて頂きます。進歩総説「界面活性剤の分析」を著されるなど、ご存知の方も多いと思います。楽しみにしております！

[AGC株式会社 伊勢村次秀]